

出エジプト

話

紀元前1,700年ごろ中近東のイスラエル人は（総てではないが）エジプトへ行った。それは仕事を探すため、または飢饉の時に食べ物を探すためだったようだ。

創世記 12章 10節

その地方に飢饉があった。アブラムは、その地方の飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在することにした。

創世記 42章 1節

ヤコブは、エジプトに穀物があると知って、息子たちに、「どうしてお前たちは顔を見合わせてばかりいるのだ」と言い、更に、「聞くところでは、エジプトには穀物があるというではないか。エジプトへ下って行って穀物を買ってきなさい。そうすれば、我々は死なずに生き延びることができるではないか」と言った。

最初はうまく行った。エジプトの支配者たちは彼らを歓迎してヘブライ人は土地をもらってある程度豊かな生活ができた。

ヘブライ人が外国へ行ったのと同じように、昔、日本の貧しい人々も外国へ行きその中には唐行きさんもいた。その後ブラジルや米国へも多くの日本人が移住した。このことは日本カトリック司教協議会の社会司教委員会が書いた「国籍を超えた神の国をめざして」（1992年）に書いてある。

しかし、エジプト人の支配者が変わって新しい支配者はヘブライ人は脅威だと思って強く支配することにした。

1994年に山梨の友達は「フィリピン人は、怖いと思わない？」と言った。

出エジプト記 1章 8節

そのころ、ヨセフのことを知らない新しい王が出てエジプトを支配し、国民に

警告した。「イスラエル人という民は、今や、我々にとってあまりに数多く、強力になりすぎた。抜かりなく取り扱い、これ以上の増加を食い止めよう。一度戦争が起これば、敵側に付いて我々と戦い、この国を取るかもしれない。」

先ず、重労働をさせた。それは重労働して疲れてエジプト人に対して企むエネルギーがなくなるという考えだっただろう。「十戒」という映画にこういうシーンがある。

出エジプト記 1章 11～14節

エジプト人はそこで、イスラエルの人々の上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待した。イスラエルの人々はファラオの物資貯蔵の町、ピトムとラメセスを建設した。しかし、虐待されればされるほど彼らは増え広がったので、エジプト人はますますイスラエルの人々を嫌悪し、イスラエルの人々を酷使し、粘土こね、れんが焼き、あらゆる農作業などの重労働によって彼らの生活を脅かした。彼らが従事した労働はいずれも過酷を極めた。

この重労働はイスラエル人を押さえる事は出来なかった。それでイスラエル人の男の子を殺すことにした。

出エジプト記 1章 15節

エジプト王は二人のヘブライ人の助産婦に命じた。一人はシフラといい、もう一人はプアといった。「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、子供の性別を確かめ、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ。」

王が死んだ時にイスラエル人は神様に「助けて下さい」と叫んだ。神様は彼らの苦しみを知って助けることにした。

出エジプト記 2章 23～25節

それから長い年月がたち、エジプト王は死んだ。その間イスラエルの人々は労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた。神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた。

この箇所には神様は苦しんでいる人々の叫び声を聞いて彼らを助けることに決める。初めてのこういう箇所だ。大変重要な箇所だ。強調しすぎではない。

「苦しい時の神頼み」という言葉があるが、神様は一人の人ではなく民も助けるということだ。苦しむ一人の人と同じように、苦しむ民を神様が助けることは当然だ。神様が助けるのは個人だけではない。この点は「解放の神学」などの基盤となった。

次に神様は歴史の中に行動して神様の民を救い出すという事ではっきりとご自分をイスラエル人に掲示した。

出エジプト記 3章 7～10節

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

もう一つの重要なことは神様は苦しむ人々の中から一人の人を選んで彼を導くことを通して彼らを救い出すのだ。つまり、超自然な方法で救い出すのではなくて、自然な、人間的な方法で彼らを救い出すのだ。

南アフリカのネルソン・マンデラさんはこういう人だったろう。「遠い夜明け」という映画はその国の圧迫された人々の状況を描いた。

出エジプト記 6章 6節は同じような箇所だ：

それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。わたしは主である。わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う。

私たちは神様は私たちが救って下さると思うがそれは個人の罪から、つまり罪の罰＝地獄から救って下さるということだ。聖書には「救い」にはもっと広い意味がある。実は救いは完全な救いだ。私たちが受けるあらゆる圧迫からの救いだ。イエスがおっしゃったように：

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」

(ヨハネによる福音書 10章 10節)

神様は私たちが完全に救い出したいと思っている。肉体的に、精神的に、社会的に、政治的に。

日本の歴史には神様が人々を救い出す例があるだろうか。足尾銅山の田中正造はどうだろうか？ 他にも沢山あるだろう。

それから、イスラエル人はエジプト人と戦ってエジプトから逃げ出した：
出エジプト記 13章 17節～14章 31節。

(あらゆる徹夜祭の起りであるこの徹夜祭には九つの朗読があるが、そのうち七つは旧約聖書から、二つは新約聖書（使徒書と福音）から取られたものである。司牧的理由で旧約聖書の朗読の数を減らすことができる。。。ただし出エジプト記14章の朗読を省いてはならない。ミサ典礼書 248)

多くの宗教には神聖な書がある。それには神様がその予言者や創立者に掲示した教えが書いてある。イスラエル人には神様が先ずご自分をすばらしい歴史的な救い出しによって掲示したのだ。この体験、救い出しがその宗教の基盤となった。勿論のことで彼らはこの体験を時代から時代へ告げ知らせた。そのあと彼らはこの体験を書き出して（旧約の）聖書ができたのだ。

将来、あなたの子が、「我々の神、主が命じられたこれらの定めと掟と法は何のためですか」と尋ねるときには、あなたの子にこう答えなさい。「我々はエジプトでファラオの奴隷であったが、主は力ある御手をもって我々をエジプトから導き出された。主は我々の目の前で、エジプトとファラオとその宮廷全体に対して大きな恐ろしいしるしと奇跡を行い、我々をそこから導き出し、我々の先祖に誓われたこの土地に導き入れ、それを我々に与えられた。主は我々に

これらの掟をすべて行うように命じ、我々の神、主を畏れるようにし、今日あるように、常に幸いに生きるようにしてくださった。我々が命じられたとおり、我々の神、主の御前で、この戒めをすべて忠実に行うよう注意するならば、我々は報いを受ける。」（申命記 6章 20～25節）

エジプトからの救い出しを思い出すためにイスラエル人は「過越」という祭を作った：

エジプトの国で、主はモーセとアロンに言われた。「この月をあなたたちの正月とし、年の初めの月としなさい。イスラエルの共同体全体に次のように告げなさい。『今月の十日、人はそれぞれ父の家ごとに、すなわち家族ごとに小羊を一匹用意しなければならない。もし、家族が少人数で小羊一匹を食べきれない場合には、隣の家族と共に、人数に見合うものを用意し、めいめいの食べる量に見合う小羊を選ばねばならない。その小羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。用意するのは羊でも山羊でもよい。それは、この月の十四日まで取り分けておき、イスラエルの共同体の会衆が皆で夕暮れにそれを屠り、その血を取って、小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る。そしてその夜、肉を火で焼いて食べる。また、酵母を入れないパンを苦菜を添えて食べる。肉は生で食べたり、煮て食べてはならない。必ず、頭も四肢も内臓も切り離さずに火で焼かねばならない。それを翌朝まで残しておいてはならない。翌朝まで残った場合には、焼却する。それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過越である。その夜、わたしはエジプトの国を巡り、人であれ、家畜であれ、エジプトの国のすべての初子を撃つ。また、エジプトのすべての神々に裁きを行う。わたしは主である。あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼす者の災いはあなたたちに及ばない。この日は、あなたたちにとって記念すべき日となる。あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わねばならない。（出エジプト記 12章 1～14節。）

イエスの最後の晩餐はこの過越祭の時に行われた：

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分

の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。
(ヨハネによる福音書 13章 1節)

イスラエル人と一緒に他の人々もエジプトから逃げ出したようだ：
イスラエルの人々はラメセスからスコトに向けて出発した。一行は、妻子を別にして、壮年男子だけでおよそ六十万人であった。そのほか、種々雑多な人々もこれに加わった。羊、牛など、家畜もおびただしい数であった。(出エジプト記 12章 37～38節)

救い出されてからこの色々な人々は一つの民族となったようだ。最初から単一民族だったのではない。

2001年に門脇神父さんの道場で一人の参加者と英語について喋っていた。その方は英語につづりや文法の例外が多いため、覚えにくいと言っていた。それは多くの民族によって英国が何回も侵略されて他の国の言葉が混ざっているため、と私は答えた。そうしたら彼は日本人は単一の民族だと言った。

これは本当だろうか。私が読んでいる本によると元々、大昔アジアの色々ところと太平洋から人々が日本に渡って来たそうだ。その後も現在の韓国・朝鮮からも人々が渡って来た。私は高麗神社の神主の話を聞かせてもらったことがあるが面白いことに彼の祖先が日本に来た時に日本の支配者から歓迎されたそうだ。

イスラエル人はエジプトにおいての支配と圧迫の体験によって外国人や 寄留者の苦しみをよく理解して彼らを守る社会を立てることにした：

あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。
(レビ記 19章 34節)

エジプトからイスラエル人と一緒に逃げ出した他の人々は色々な神々を信じたようだ。

ヨシュアは民全員に告げた。「イスラエルの神、主はこう言われた。『あなた

たちの先祖は、アブラハムとナホルの父テラを含めて、昔ユーフラテス川の向こうに住み、他の神々を拝んでいた。（ヨシュア記 24章 2節）

あなたたちはだから、主を畏れ、真心を込め真実をもって彼に仕え、あなたたちの先祖が川の向こう側やエジプトで仕えていた神々を除き去って、主に仕えなさい。（ヨシュア記 24章 14節）

民は答えた。「主を捨てて、ほかの神々に仕えることなど、するはずがありません。（ヨシュア記 24章 16節）

エジプト人に勝ってその支配と圧迫から逃げるのができたのは神様の力によってできたこの人々は信じるようになった。そしてそれまで信じた他の神々を捨てて救い出して下さった神様だけを信じることに決めた。他の神々の存在をまだ信じていただろうが、救って下さった一人の神様だけを拝むことにしたのだ。

Madonna Kolbenschlag（学者、フェミニスト）が指摘するのは出エジプトに女性も大事な役割を果たした。

エジプト王は二人のヘブライ人の助産婦に命じた。一人はシフラといい、もう一人はプアといった。「お前たちがヘブライ人の女の出産を助けるときには、子供の性別を確かめ、男の子ならば殺し、女の子ならば生かしておけ。」助産婦はいずれも神を畏れていたので、エジプト王が命じたとおりにせず、男の子も生かしておいた。（出エジプト記 1章 15～17節）

モーゼの母親も王様の命令に逆らった。（出エジプト記 2章 1～10節）この女性たちが逆らったためエジプト人の支配や圧迫に対する反対運動ができたのだ。

神様に従うため政治的な支配者に逆らう必要がある時もある。

又、面白いことで王女も同じ命令に逆らった！（出エジプト記 2章 5～10節）

あしがき

この話によつて学ぶこと：

- 1 歴史的な流れ（が分かる重要さ）
- 2 出エジプトと同じように現代も神様は歴史の中に働いていること
第2バチカン公会議は時のしるしを話した

このような務めを果たすために、教会は時のしるしを探求して、福音の光のもとにそれを解明する義務を常に持っている。（第2バチカン公会議公文書現代世界憲章 4）

3 残念ながら昔からカトリック教会の多くの信徒には聖書を読む慣習はない。それは教会の権力者が一般の信徒が聖書を誤解することを懸念していたため、信徒に聖書を読んではいけないと命じていたのだ！

このため多くの信徒は以上の出エジプトの話は知らない、あるいはよくは知らない。（知らないのは出エジプトだけではないが。）それでラテンアメリカの神学者・聖書学者が出エジプトの話をもとにして解放の神学を作った時に多くの豊かな国々の信徒は解放の神学を受け入れなかった。

大昔コンピュータはなかった。書く物もなかった。大事な話は時代から時代へ口で伝わった。時とともに話は少し変わって来た。又、地方によって話は異なっていた。日本では古事記と日本書紀があるが中身は矛盾するところがある。例えば、古事記によると伊邪那岐が右目を洗った時に天照大御神は生まれたが日本書紀によると伊邪那岐と伊邪那美と一緒に天照大御神を作る。しかも日本書紀には天照大御神は大日靈貴（おおひるめむち）と呼ばれる。聖書にも同じことがある。出エジプトの話が文書にされたのは起きてから何百年も経ってからのことだ。

エクササイズ

- 1 奴隷であったヘブライ人はどんな気持ちだったと思いますか。
- 2 現代同じような事が起こっていると思いますか。

3 彼らを御覧になって、神様はどんな気持ちだったと思いますか。

次回のセッションの準備として

出エジプト記 15 章 1 節 ~ 20 章 26 節 を読んでおいて下さい。